

「挨拶語」・「挨拶言葉」という用語に関するノート

石川 創*

Notes on Terminology: *Aisatsu-go* and *Aisatsu-kotoba*

So ISHIKAWA*

Abstract

Expressions used for greetings in modern Japanese, such as *ohayo*, are called *aisatsu-go* or *aisatsu-kotoba*. However, the definition of these terms has remained unsettled until today. Moreover, in contemporary times, they are classified as *aisatsu-go* and *aisatsu-kotoba*, but they have been interpreted differently in past research on grammar.

This study diachronically examines Japanese-language textbooks and dictionaries, in addition to research texts on the Japanese language. Moreover, it summarizes how *aisatsu-go* and *aisatsu-kotoba* have been used in daily vocabulary and in studies of the Japanese language and Japanese-language instruction.

【キーワード】 あいさつ語 あいさつことば 感動詞 国語教科書 国語辞書

1. はじめに

現在の国語教育において、感動詞は「感動、応答、呼びかけ、あいさつ」などをあらわすものと説明されることが多い¹。また、多くの国語辞書において「おはよう、こんにちは」などの語群が「感動詞」として収録されている。

近年の日本語学においても、「感動詞」を定義する際に、「あいさつ」について言及することが一般的である²。たとえば『国語学大辞典』(1980年)³における「感動詞」の項(渡辺実執筆)では、感動詞を「自分の感動・詠嘆の感情、相手に対する呼びかけ・応答の作用」を表すものとしつつ、「『どうぞ。』などは、『どうぞ、お入り下さい』の省略と言うより、すでに一つ

の感動詞と認めてよいかも知れない。特にこのような応接・挨拶の言葉は高速度に慣用化され、応答詞に近接し感動詞にまぎれ込む。」としてゐる。また、『日本語学研究事典』(2007年)⁴の「感動詞」の項(小林賢次執筆)では、感動詞の意味・用法を、「話し手の感動・詠嘆・疑問などの感情を表出するもの」、「呼びかけ」、「応答」の3種に分けつつ、「『こんにちは』『さようなら』などの挨拶言葉」などについても、「感動詞に含める立場もある」としている。

なお、「おはよう、こんにちは」などの「あいさつ」に用いられる語を指して、「挨拶語」と呼ぶことある。『国語学辞典』(1955年)⁵の「感動詞」(金田一春彦執筆)の項では、感動詞を「感

*人文学部 日本文化学科

情の表出をするもの」と「応問に用いられるもの」とに分け、後者について、『おはよう・こんにちは』のようなあいさつ語もこれに準ずるものである」としており、また「あいさつ」（上甲幹一執筆）の項でも、「再対面以後のあいさつは、お互の交際関係の維持がおもな目的となるため、その語句は、ほぼ固定化された表現ですませることが多い。狭い意味のあいさつは、こうした場合のものだけをさし、その固定化した語句をあいさつ語と言う。」と述べており、当時「挨拶語」という術語が一般的に用いられていたことがわかる。

しかし、いつごろから「挨拶語」という用語が用いられるようになったのか、またいつごろから感動詞の一類とするのが一般的になったのかについては、これまであまり言及されることがなかった。さらに、上述の『日本語学研究事典』において、「こんにちは」「さようなら」などの語を「挨拶言葉」としているように、近年では「挨拶語」より、「挨拶言葉」の方が一般的になってきているようである。

本稿では「挨拶語」および「挨拶言葉」という用語がどのように一般語として、また学術用語として用いられるようになったのかを考察する手がかりとするために、日本語学の研究書、国語教科書、国語辞書など、種々の資料を観察する。

なお、過去の用例においては「挨拶語」、「あいさつ語」、また「挨拶言葉」、「あいさつ言葉」、「あいさつことば」のように種々の表記が見られるが、本稿では、個々の用例を取り上げる場合以外は、「挨拶語」・「挨拶言葉」と総称する。

2. 一般語としての「挨拶語」および「挨拶言葉」

2.1 戦前における「挨拶語」の例

本節では、「挨拶語」ということばがいつごろから用いられるようになったのか、また現代

にいたるまでどのような意味で用いられていたのかを観察する。

本稿の調査でさかのぼることのできた、「挨拶語」ということばが用いられたもっとも古い例は、『風俗画報』第185号（1899年3月）⁶に掲載された、れいてい氏による「和歌山の挨拶語」という記事である。冒頭には「東京の入ツしやい大阪のお出でやす、挨拶の語も土地によりてさまゝなり、予は今和歌山にて最も普通に用ゐらるゝ挨拶語を左に掲げん」⁷（p.12）と述べられ、「結構な」、「お仕舞ひ」（訪問時のことば）、「おあがり」（訪問を受けた方の応答）などの例が示されている。

ちなみにこの記事を受けて、池田かげろふ氏による「加賀国金沢の挨拶語」（『風俗画報』第190号、1899年6月）⁸が投稿されており、「コンネー」（物品の購求時に客が店頭でいう）、「ヤーヤ」「オイダスバセ」（商店の側の応答）などの例（p.17）が挙げられている。

現代においても、上記二氏の実稿中にあらわれる種々の例は、「挨拶語」とみなされうるものである⁹。ただし当時の国文法の研究書や国語辞書において、「挨拶語」という術語が使用された例は、本稿における調査のかぎりは見つからず、この時点で「挨拶語」ということばが一般的であったとは考えにくい。れいてい氏が原稿を執筆する際に、このことばを臨時的に用いたと考える方が自然であろう。

ただ、国文法の研究書や国語辞書には「挨拶語」という術語が見られない一方で、日本人が外国語を習得するため、あるいは外国人が日本語を学習するための書籍においては、明治末期から大正初期のころより使用が認められる。

たとえば清語学堂速成科編『清語正規』（1906年）¹⁰においては、附録に「挨拶語の成句」の項があり（pp.242-245）、「多謝多謝 有難うございます」、「該死該死 甚失礼しました」、「恭

喜恭喜 お目出度^{マア}ふ」などの例があげられている。

また海外雄飛会編『四国対照 南洋語自在』（1914年）¹¹では、「会話の部」の第二章が「挨拶語」（pp.211-215）となっており、「お早う、今日は、今晚は、左様なら」などに相当する「Tabek」・「tabe」をはじめとして、マレー語における挨拶に用いられる表現が紹介されている。ちなみに、この「挨拶語」の章の中には、「御機嫌は如何です」、「健です」、「御達者で結構です」、「御菓子を召上れ」、「お茶をお上りなさい」などの例もあげられている。

上記の例のうち、『清語正規』における「甚失礼しました」や、『四国対照 南洋語自在』における「御菓子を召上れ」、「お茶をお上りなさい」などの表現は、現代において「挨拶語」とは認定されにくいものであろう。それは、たとえば「御菓子を召上れ」と「お茶をお上りなさい」において、「御菓子」と「お茶」を相互に、あるいは別語に置き換えることが可能であったり、表現全体を述語や目的語、修飾語などの成分に分解するのが容易であったりすることに原因があると思われる。第1節で挙げた『国語学辞典』においても、「あいさつ語」を「固定化した語句」と述べている。

このような「固定化した語句」とは言いにくい「挨拶語」の例は、戦前の複数の資料で見られる。渡俊治『速成日語輯要』（1934年）¹²の第三編「会話」・第一章「問答上」の第二節が「挨拶語」（pp.211-218）であるが、「御無沙汰致しました」、「どう致しまして」などといった、現代でも「挨拶語」として通用しそうな「固定化した語句」がある一方で、「御転宅なすつたようですがどちらへですか」、「間数は幾間ございますか」といった例も挙げられている。稲葉鼎一郎『上海語指南』（1936年）¹³の第十五章～十八章「挨拶語」（集句、初会、久違、賀歳。

pp.35-46）でも同様であり、「お早う」、「今日は」、「今晚は」といった語句がある一方で、「此頃何処かへ遊びに行く御心算ですか」なども「挨拶語」の例文として挙げられている。

なお、特殊な「挨拶語」の例として、アル・デ・エム・シヨウ『聖餐式文註釈』（1919年）¹⁴があった。同書では、「挨拶語」の章があり、次のような文章で始まっている。

願くは主汝等と偕に在すことを。

（得二〇四）

願くは主汝の霊と偕に在すことを。

（撒後三〇一六）

（祈祷書一三八頁）

「讚美の頌」が終つて、祈祷文に移ります。「讚美の頌」の始めにハレルヤ（主を讚まつる）とありました様に。祈祷文の始めにも。此有名な基督教信者の挨拶語があります。（pp.48-49）

ここで「挨拶語」の例として挙げられている表現は、『四国対照 南洋語自在』等の用例と比べても、明らかに異質なものである。

ただし、この本文中の「挨拶語」には、「あいさつのことば」とルビが付されており、表記こそ「挨拶語」であるものの、「アイサツゴ」とは読んでいない。

このように「挨拶語」を「アイサツゴ」と読まない例は、他にも見つけられる。『読売新聞』1917年3月23日5面¹⁵に、「●『体量は幾ら減つたか』◇伯林（べるりん）の挨拶語（あいさつことば）」という見出しの記事があり、本文中には「伯林の街なぞでは知合同士が出会（でくは）すと屹度『君の体量は幾封度（ポンド）減りましたか』といふのを発し合ひ、それが今では好意を表はす一種の挨拶にまで成つて居る

といふ」という記述がある。

ここでは「挨拶語」を「あいさつことば」と読んでいたが、『聖餐式文註釈』の「挨拶語（あいさつのことば）」とは異なり、本節で挙げた他の「挨拶語」と同様の意味で用いられていると考えられる。「あいさつことば」（挨拶言葉）は、次項にて述べるように戦後に定着していったが、1910年代よりこの語形は存在していたことがわかる。

いずれにしても、明治後期から戦前にかけて、すでに「挨拶語」ということばの使用は見られるが、すべての例で「アイサツゴ」と読んでいたとはいえず、また「固定化」・「定型化」した語（句）として用いられるか否かについてもゆれがあったといえるであろう。

なお戦前において、明確に「挨拶語」を単語として扱っていた例として、三宅武郎『国民学校アクセント解説 第二学年用』（1943年）¹⁶がある。三宅は「『御〇〇様』の挨拶語」の節において、「オマチドーサマ、オキノドクサマ、ゴチソーサマ、ゴクローサマ」のアクセントについて示した上で、「前の三者はABアクセントを形成する格であるが、今日、中央語では下中型である。恐らく挨拶語として平板化したものであらう。」(p.73)と解説している。アクセントに関する解説である以上、同書ではこれらの「挨拶語」を、単語として扱っていたということになる。

2.2 戦後における「挨拶語」と「挨拶言葉」

本項では、戦後における「挨拶語」と、戦前にも一部に見られた「挨拶言葉」の用例を観察する。

まず「挨拶語」について、国語審議会建議「これからの敬語」（1952年4月）においては、「8 あいさつ語」の節がある。「あいさつ語は、慣用語句として、きまった形のままでよい」とした上で、「おはよう。」・「おはようございます。」、

「おやすみ。」・「おやすみなさい。」、「いただきます。」・「ごちそうさま。」、「いってきます。」・「いってまいります。」・「いってらっしゃい。」の例が挙げられている¹⁷。この時期には、「挨拶語」とは、「固定化」された語句を指すものであるという定義が、ほぼ定着していたといえよう。

しかし、前項でも戦前において「挨拶語」を「あいさつことば」と読ませる例があったことを示したが、1960年ころより「挨拶言葉」（あいさつ言葉、あいさつことば）の例が見られるようになってくる。

たとえば『朝日新聞』1961年11月20日朝刊9面では、「NHK 今週のラジオ歌謡」に関する記事があり、「あいさつ言葉」（長田恒雄作詞）が取り上げられている。

また奥山益郎編『あいさつ語辞典』（1970年）¹⁸では、凡例に「見出し項目は、現在普通に行なわれているあいさつことば、かつて行なわれていたあいさつことば等を、仮名の太字で示し、次に【 】で括ってその漢字まじりを示した。」という項目がある。「あいさつ語」および「あいさつことば」の定義については特に言及されていない。

次に挙げる例も、「挨拶語」と「挨拶言葉」が併用されているものである。

あいさつ語の話をしたい。銀座六丁目の一流レストランが朝のうちだけ、いちぜんめしを出している。勘定を払うヘルメット姿の作業員に、店の看板娘が「行ってらっしゃい」「気をつけてね」と声をかける。▼その銀座らしからぬあいさつ言葉がうけているという話をきいた。そういえば、いらっしやいまし、ありがとう存じますというごくふつうの商いのあいさつが、最近はめっきり減った（中略）▼昔の旧制高校生は、

選手団を見送る時に「バカヤロー」と叫んで、歓送の意を表したというから、日本のあいさつ言葉はややこしい。(中略) あいさつ語の中ではやはり「ありがとう」がいちばん美しい。

(『天声人語』、『朝日新聞』1978年5月28日朝刊1面¹⁹⁾)

これらの例においては、「挨拶語」と「挨拶言葉」は自由に入れ替えて使用することのできる同義のものと認識されていたと考えられる。「挨拶言葉」は戦後、特に1960年代より一般的に使用されるようになっていったが、それは「挨拶語」と区別せずに用いられる場合も少なくなかったといえそうである。

ちなみに前項で述べたとおり、1917年の時点で「挨拶語」を「あいさつことば」と読ませる例はあったが、「語」という表記を用いずに、「言葉」という表記を用いた「挨拶言葉」の例も、戦前から見られる。『東京朝日新聞』1941年11月11日夕刊1面の「鉄箒」欄に、「挨拶言葉の工夫」という題目の読者からの投稿があり、「近頃路上でも乗物でも、出会ひ頭に口を衝ひて出る挨拶は『どうだ、儲かるか』である。」という書き出しで始まっている²⁰⁾。ただ、同時期に他の「挨拶言葉」の使用例が見られないことからすれば、この「挨拶言葉」は、投稿者による臨時的な使用であったとも考えられる。

本節では、主に一般語としての「挨拶語」および「挨拶言葉」について取り上げた。次節では、日本語学(国語学)において、「挨拶語」、ならびに「挨拶言葉」がどのように扱われてきたのかを観察する。

3. 術語としての「挨拶語」・「挨拶言葉」

3.1 術語として「挨拶語」の衰退

戦後以降の日本語学(国語学)において、基

本的に挨拶語が「感動詞」の中に位置づけられるものであることは、第1節でも『国語学辞典』(1955年)、『国語学大辞典』(1980年)、ならびに『日本語学研究事典』(2007年)における記述を示したとおりである。ただ、『国語学大辞典』では「挨拶の言葉」、『日本語学研究事典』では「挨拶言葉」としており、『国語学辞典』で見られた「挨拶語」は用いていない。一般語としては1960年代以降、「挨拶語」と「挨拶言葉」はほぼ同義で併用されていたことを前節で指摘したが、日本語学(国語学)の術語としても同様なのであろうか。

1955年の『国語学辞典』で「あいさつ語」が用いられているように、当時の論考には、岩井隆盛「加賀と能登の『挨拶語』」(1955年)²¹⁾など、「挨拶語」を使用するものが多く見られる。しかし1960年ころより、浅見徹「あいさつことば西と東」(1960年)²²⁾のように、「あいさつことば」の使用も見られるようになってくる。こうした傾向は、前節で観察した一般語としての「挨拶語」・「挨拶言葉」の関係に近い。

1980年代以降になると、日本語学関連の雑誌において、「あいさつ」が特集されるような場合においても、「特集 あいさつ言葉」(『日本語学』第4巻第8号、1985年)²³⁾、「あいさつことばとコミュニケーション」(『国文学 解釈と教材の研究』第44巻6号、1999年5月)²⁴⁾といった表題で編まれるようになる。日本語学の術語としては、「挨拶言葉」の方が、一般的に使用されているのが現状であるといえる。

3.2 挨拶言葉は「語」か「文」か

それでは、なぜ術語としては「挨拶言葉」が積極的に使われるのであろうか。

「挨拶言葉」に関する代表的な研究書として、藤原与一『続昭和(→平成)日本語方言の総合的研究 第三巻 あいさつことばの世界』(1992年)²⁵⁾や、寺島浩子『「あいさつ言葉」の魅力

—京言葉を起点として—』(2016年)²⁶などがある。

藤原与一は、『続昭和(→平成)日本語方言の総合的研究 第三巻 あいさつことばの世界』の冒頭にて、「考えてみれば、人の会話はみなあいさつである。(『挨拶』とは、『おしあつて進む』の意のものであるという。)会話の特定化したものが、いわゆるあいさつことばである。——あいさつ表現の形式である。」(p.1)と述べており、また同書の巻末に、索引のひとつとして「事象索引(主要「あいさつ文(『あいさつことば』)彙集)」を設けている。このことから、藤原は「あいさつことば」を「文」の単位としてとらえていることがわかる。

また寺島浩子は、『『あいさつ言葉』の魅力—京言葉を起点として—』の書中において、『『あいさつ言葉』の記述にあたって、藤原与一氏の論考から大きな影響を受けている』(p.23)と述べており、第二章を「藤原与一氏の著述における『あいさつことば』」として、『続昭和(→平成)日本語方言の総合的研究 第三巻 あいさつことばの世界』の序章の一部を引用している。寺島は藤原と同じく、「あいさつ言葉」を「文」の単位としてとらえていると考えてよいであろう。

藤原をはじめとする研究者が「挨拶語」という術語を用いなかった理由のひとつに、上記のように「挨拶言葉」を「文」の単位として考えていたということがあるのではなからうか。「語」という形態素は必ずしも「単語」を指すものではないが、「文」の単位でとらえている成分に「挨拶語」を用いる積極的な理由はなく、「挨拶言葉」を使用することにより、語(単語)以上の単位として定義していることを示すことができる。そのため日本語学においては、「挨拶言葉」が定着していったものと考えられる。

ただ、さきにも述べたように、『日本語学研究事典』の「感動詞」の項目においては「挨拶

言葉」が用いられているし、近年の研究においても、「挨拶言葉」を「語」の単位として扱うものもあり、たとえば倉持益子は、「あいさつ言葉は、日本語文法の品詞では感動詞に分類される。感動詞とは、自ら発する感動(感嘆)の言葉と他者への呼びかけからなる自立語である。したがって、あいさつ言葉は、他者への呼びかけを目的とした自立語と定義づけられるであろう。」としている²⁷。倉持は上記の定義をした上で、「めし食った?」「今から?」等の質問についても「あいさつ言葉」の範疇に含めている。

日本語学において、現在術語としては「挨拶言葉」が定着しているが、それが「文」を指すか「語」を指すかについては、研究者によってとらえ方が異なるといえる。

3.3 「挨拶語」・「挨拶言葉」の感動詞としての認定

前項までに述べたように、現代日本語において挨拶語・挨拶言葉を文とするか語とするかは研究者の立場によって異なるが、少なくとも大事典類などにおける概説では、感動詞の一類とされることが一般的である。『国語学辞典』(1955年)において、挨拶語を感動詞の一類としており、この時期には一般的な説となっていたと考えてよいであろう。

しかし戦前の研究書を見ると、挨拶語を感動詞の一類としないものも少なくない。

たとえば佐久間鼎『現代日本語法の研究』(1940年)²⁸では、「一〇 感動詞乃至間投詞」の章にて、「感動詞は感動の情をあらはす語や、呼びかけ・応答に用いる語で、その意味から見れば、その内容を分析せず、そのまゝ全体的に直接に言ひ表すのが特徴になつている(橋本氏)といはれます。」(p.130)としており、ここでは挨拶語に関する言及がない。ただし、「一 形容詞の特性」の章において、形容詞に関する長母音の形について解説する中で、「お寒う(オ

サムー)ございます。]や「おはやう(オハヨー)。」(p.14。下線や記号などは省略)などの例を挙げ、「これらはいずれも挨拶の用語として固まつたものになつてゐますが」(p.14)と述べている。

また、木枝増一『高等国文法新講 品詞篇』(1937年)²⁹でも、感動詞に関する解説の中に挨拶語に関する言及はないが、第四章「動詞」の第三節「動詞の形態」において、「命令形」の「特殊なる用法と認められるもの」のひとつに、「一種の挨拶語として用ひられる場合」を挙げ、「いらつしやい。どうぞお上り下さい。」と「お帰りなさい。早かつたですね。」を例としている(pp.172-173)。また、第五章「形容詞」の第四節「口語形容詞の各活用形の用法」において、「連用形」について論ずる中で、「談話用の語」として「どうかよろしく。」「お早う。」「お目出度う。」「御機嫌よう。」といったものがあることについて触れ、「これはその下に來るべき被修飾語『言つて下さい。』とか『御座います』とか『存じます』とかの語を省略したと見るべきである。しかし、いづれの国語に於ても挨拶語は特殊な形をとるのが常であるから(中略)特殊文の扱ひをすべきが妥当であらう。特殊文とすれば省略を論ずる必要はないのである。」(p.299)と述べている。

このように1930-40年代の研究書において、挨拶語を感動詞として認定しないものも少なからず見られながら、1950年代には挨拶語を感動詞の分類の一とする解釈が一般的になっていたと考えられるのは興味深い。

4. 国語教育における「挨拶語」の扱い

4.1 中学国語教科書の調査について

本節では、国語教育において「挨拶語」がどのように扱われてきたのかを考える。国語教育で指導される文法は、日常の言語行動の規範となるものであり、国語教科書の中での挨拶語の

扱いは、社会の中で一般に用いられる「挨拶」の扱い、および「挨拶語(挨拶言葉)」という用語の定義に、大きな影響を与えると考えられる。

第1節でも述べたように、現代の国語教育、すなわち現行の中学国語教科書においては、感動詞の分類の一に「あいさつ」を含めている場合が多い。しかし、戦後から現在にかけての教科書の記述を観察すると、はじめから「あいさつ」に言及されているわけではなかった。学校文法の基礎となった、文部省編『中等文法 口語』(1947年)³⁰においては、感動詞は「主語にも述語にも修飾語にもならない語」、「それだけで一つの文をなすことが少なくない」(いずれも p.20)など、文の成分としての観点から解説されており、そもそも意味によって分類はされていないが、例文として「あ、そうだった。」「おい、網を揚げるんだ。」「お、熱い。」「もし、佐藤さん。」「はい、わかりました。」「え、参りましょう。」「いや、そんな気持はありません。」「(あなたは御存じですか。) い、え。」(いずれも p.20)が挙げられており、「おはよう、こんにちは」といった語には触れられていない。

次項では、戦後の中学国語教科書が、口語文法の解説において、「感動詞」と「あいさつ」の関係をどのように記述してきたかを観察する。

なお本節で示す教科書は、すべて公益財団法人教科書研究センター附属教科書図書館(以下、本稿中では「教科書図書館」とする)所蔵の資料を確認したものである。それぞれの教科書には、書誌情報に関する注を付している。一部の資料は、教科書研究センター用の見本であり、検定や発行の年月日が空欄になっていたため、「公益財団法人教科書研究センター」ホームページ内の「教科書図書館 所蔵資料検索ページ」³¹より検索できる「教科書目録情報データベース」記載の情報を参照した。

なお、感動詞に挨拶語を含めるか否かはひとつの見識にすぎず、前節までにも見たように、日本語学においても一定の見解はない。本稿において、教科書における文法解説が適切であるか否かを論ずる意図は一切ないことを、はじめに述べておく。

4.2 中学国語教科書における「感動詞」と「あいさつ（語）」の関係

「あいさつ」を感動詞の意味のひとつに挙げた初期の中学国語教科書として、大阪書籍の『中学国語 二年』（1961年文部省検定済）³²がある。感動詞を意味の上から「感動を表わすもの」、「呼びかけの気持ちを表わすもの」、「応答を表わすもの」、「あいさつの気持ちを表わすもの」の四種に分け、「あいさつの気持ちを表わすもの」の例として、「おはよう・こんにちは・こんばんは・さようなら」を挙げている（p.357）。ちなみに、『中学国語 二年』（1965年文部省検定済）³³における解説でも基本的な内容は変わらないが、四種の分類名を「感動語」、「呼びかけ語」、「応答語」、「あいさつ語」にあらためており、「あいさつ語」ということばが、教科書の記述中にあらわれている。

その他の出版社の教科書を見ると、三省堂では『中学校 現代の国語 最新版 1』（1971年文部省検定済）³⁴が、「独立部」の分類の一つに「b 呼びかけ・受け答え・あいさつ・呼び・かけ声などを表わす」ものを挙げ、「あいさつ」の例を「こんにちは、お寒いですね。」としている。その上で、「bの種類になることのできる単語は、『中村君』のような人の名前か、『もしもし』『はい』『こんにちは』『まあ』『さあ』などの単語である。このように、もっぱら、bの種類にしかねない単語は『感動詞』と言う。」（p.265）と解説している。これより前の『中学校 現代の国語 新版 1』（1968年文部省検定済）³⁵では、この独立部の分類を「呼びかけ・

受け答え・呼び・かけ声などを表わすもの」（p.343）としており、「あいさつ」に言及していない。

学校図書では『中学校国語 二』（1986年文部省検定済、1987年1月）³⁶が、感動詞の分類のひとつにはじめて「あいさつの気持ちを表わすもの」を含めている（例文は「こんにちは、お元気ですか。」および「今晚は。」、p.285）。これより前の『中学校国語 二』（1980年文部省検定済、1983年改訂検定済、1984年1月）³⁷では、感動詞を「活用がなく、感動の気持ち、呼びかけ、応答、かけ声などを表す。」（p.293）と解説している。ただし、例として「あら まあ もしもし いいえ こんにちは」が挙げられており、「こんにちは」が感動詞として扱われている。

このように、「挨拶語」ということばを使うか否かについてはゆれがあるが、後の年代になるほどに、感動詞の一類に挨拶語を含める教科書が増えてゆく。ただ、同時期に一斉に記述が変化したということはなかった。

なお、現行の教科書にいたるまで一度も「感動詞」と「あいさつ」とを関連付けていない出版社もある。また、一度「あいさつ」を含めるも、のちの改訂で除外し、さらにその後の改訂であらためて「あいさつ」に言及する、という経緯をたどっている出版社もある。

以上のとおり、「あいさつ」に関する語は、学校文法においてもゆれのある存在である。

5. 国語辞書における「挨拶語」

5.1 現代の国語辞書における品詞認定のゆれ

本節では、国語辞書において「挨拶語」がどのように扱われているかを観察する。国語辞書は、前節までにとりあげてきた日本語学の研究書や国語教科書に比して、きわめて多くの挨拶語を掲載するものである。

現代における代表的な大型国語辞書である

『日本国語大辞典』の第二版(2000-02年,注9参照)では、「感動詞」について、「挨拶(あいさつ)に用いる語(おはよう・しっけい)」などを含めることもあるとしている。しかし、「おはよう」を感動詞として、「相手が早く出てきたことに対する挨拶のことば。」、および「朝はじめて会った時の、挨拶のことば。」という語釈を示す一方で、「しっけい」は、語釈のひとつに「別れるとき、人の前を通るときなどに挨拶(あいさつ)として発する語。多く男性が感動詞的に用いる。ごめん。」を挙げながらも、品詞としては名詞である。さらに、「こんばんは」の語釈は「夜間、他家を訪問したとき、また、人に会ったときという挨拶語。」となっているが、品詞は「連語」となっており、感動詞とはされていない。

こうした国語辞書における品詞認定のゆれについては、松井栄一が以下のように指摘している³⁸。

たとえば、「ありがとう」「おはよう」「こんにちは」などはどう処理すればよいか。前二語は「形容詞の連用形」、今一つは「連語」とするのも一つの考え方であろう。しかし、現行の辞書の多くはこれらを「感動詞」としている。ところが、その同じ辞書が、これらと類似した性質の「いらっしゃい」「おやすみ(なさい)」「ごくろう(さま)」「ごちそうさま」などを「動詞の命令形」とか「連語」とか表示していて、その間に一貫性を欠いている。その点、これらすべてを普通の品詞からはずして「あいさつ言葉」という示し方をしている辞書があるが、これなどは賢明な扱いということになる。このように、一応通用の文法体系によりながらも、個々の語の扱いについてはその用法などに応じた便宜的な表示を考え

るということも、辞書の場合には必要になってくるのである。

現行の国語辞書において、挨拶語を独立した分類として扱っているのは、『新選国語辞典』(小学館)³⁹である。同辞書では、「新版」(第4版、1974年2月)より、「あいさつ」という品詞表示があらわれる。「新版」の時点では、この品詞表示に対する説明は「あいさつ語」のみであったが、第6版(1987年1月)より凡例において「あいさつ」について言及されるようになり、「あいさつ語の多くは、感動詞・名詞や連語に属するが、この辞典では、とりたてて一類としたものである」(第6版、「この辞書を使う人のために」, p.9)と説明されている。

なお最新版である第9版(2011年1月)では、本稿の調査のかぎり68語に「あいさつ語」の品詞表示があるが、この中には、「ありがとう、おはよう、こんにちは、……」などの他に、「かしこ、けいぐ(敬具)、そうそう(草々、早々、忽々)、はいけい(拝啓)、……」などといった、手紙における頭語や結語も含まれている。

「ありがとう、おはよう、こんにちは、……」などについては、2000年以後に発行された小型国語辞書の大半が「感動詞」と認定している⁴⁰が、手紙の頭語・結語については、ほとんどの辞書が感動詞として扱っていない⁴¹。

これは、「挨拶語(挨拶言葉)」および「感動詞」をどのように定義するののかという問題にもつながる。文の成分としては、「ありがとう、おはよう、こんにちは」などはもちろん、「拝啓、敬具」なども他の成分から独立しており、感動詞として認定されてもおかしくない。しかし、感動詞は「話し手」の気持ちを表出する、というような解釈が一般的であるため、書きことばにおける独立語の品詞認定の問題についてはこれまで積極的に論じられることがなかったもの

と考えられる。「書きことば」における感動詞、および挨拶語・挨拶言葉の扱いは、今後検討されるべき問題であろう。

5.2 補足——近代国語辞書における「おさらば」の品詞について

前項では、現代の国語辞書においては、個々の語によりゆれはあるものの、基本的には挨拶語を感動詞として認定していることを示した。近代の国語辞書においては、挨拶語はいつごろから「感動詞」とみなされるようになったのであろうか。

金沢庄三郎編『辞林』の明治40年版(1907年)⁴²では「おさらば」の語釈は「さやうならば。(別れにいふ)」となっているが、品詞は「副詞」となっている。これ以前の国語辞書を見ると、多くのものがやはり「おさらば」を副詞としている。

ところが、『辞林』の明治44年版(1911年)⁴³では「おさらば」の品詞は「感動詞」となっており(語釈は「人と別るゝときにいふ語。)、挨拶語に対するとらえ方が変化していることがうかがえる。近代の代表的な大型国語辞典である上田万年・松井簡治『大日本国語辞典』(1915-19年)⁴⁴が「おさらば」を「感動詞」としていたり、落合直文『ことばの泉』(1898年序)⁴⁵で「副詞」であった「おさらば」が、同辞書を芳賀矢一が改修した『言泉』(1921-22年)⁴⁶では「感嘆詞」となっていたりするなど、まさに明治44年版の『辞林』が刊行されたころを境として、「おさらば」は国語辞書に感動詞と認定されることが一般的になったと考えられる。

なお、大和田建樹編『日本大辞典』(1896年)⁴⁷では、品詞を「感詞」とした上で、語釈を「別るゝ時の挨拶。●左様なら。」としている。品詞の認定はもちろん、語釈に「挨拶」ということばを使っている点においても、大和田の解釈は先進的である。

本項ではあくまで「おさらば」について観察したのみであり、「挨拶語」全般の扱いについては、より詳細な調査を行わなければならないが、近代における「挨拶語」の扱いを明らかにするための、ひとつの根拠となりそうである。

6. おわりに

本稿では「挨拶語」・「挨拶言葉」という用語が、一般語として、また日本語学(国語学)の術語などとして、どのように用いられてきたかを観察してきた。今回の調査を出発点として、今後は感動詞と挨拶語・挨拶言葉の関係について、詳しく考察してゆきたい。

注ならびに参考文献

- ¹ 「感動」が「感情」や「感嘆」、「呼びかけ」が「誘いかけ」になるなど、国語教科書により、若干の表現の違いはある。
- ² もちろん「あいさつ」の語を感動詞に含めないという立場もある。たとえば佐藤武義・前田富祺ほか編『日本語大事典』(朝倉書店、2014年11月)における「感嘆詞」(佐藤琢三執筆)の項では、「あいさつ」の語に関する言及がない。
- ³ 国語学会編『国語学大辞典』(東京堂出版、1980年9月)
- ⁴ 飛田良文ほか編『日本語学研究事典』(明治書院、2007年1月)
- ⁵ 国語学会編『国語学辞典』(東京堂出版、1955年8月)
- ⁶ 大串夏身・横山泰子編『風俗画報 CD-ROM版』(ゆまに書房、1997年2月)にて確認した。
- ⁷ くゝの字点に濁点が付された記号を、「\`／」として示した。
- ⁸ 注6に同じ。
- ⁹ なお、『日本国語大辞典』第二版(小学館、2000年12月-2002年12月)において、「おあが

- り」は方言の感動詞として掲載されており、その語釈のひとつに「人の訪問を受けた時の挨拶のことば。お上がり下さい。」とある。
- ¹⁰ 清語学堂速成科編『清語正規』（文求堂、1906年4月）。国立国会図書館所蔵の資料（請求記号：323-1）を確認した。
- ¹¹ 海外雄飛会編『四国対照 南洋語自在』（活人社、1914年5月）。国立国会図書館所蔵の資料（請求記号：350-311）を確認した。
- ¹² 渡俊治『速成日語輯要』（尚文堂、1934年10月）。国立国会図書館所蔵の資料（請求記号：647-117）を確認した。
- ¹³ 稲葉鼎一郎『上海語指南』（文求堂書店、1936年6月）。国立国会図書館所蔵の資料（請求記号：特213-661）を確認した。
- ¹⁴ アル・デ・エム・シヨウ『聖餐式文註釈』（日本聖公会出版社、1919年1月）。国立国会図書館所蔵の資料（請求記号：31-845）を確認した。
- ¹⁵ 「ヨミダス歴史館」（<http://www.yomiuri.co.jp/database/rekishikan/>）にて、2016年10月12日閲覧。ルビは括弧書きにして示したが、一部は省略した。
- ¹⁶ 三宅武郎『国民学校アクセント解説 第二学年用』（国語文化研究所、1943年7月）
- ¹⁷ 文化庁ホームページ内、http://kokugo.bunka.go.jp/kokugo_nihongo/joho/kakuki/01/tosin06/index.html より。2016年10月12日閲覧。
- ¹⁸ 奥山益郎編『あいさつ語辞典』（東京堂出版、1970年8月）
- ¹⁹ 「朝日新聞記事データベース 聞蔵Ⅱビジュアル・フォーライブラリー」<http://database.asahi.com/index.shtml> にて2016年10月12日閲覧。
- ²⁰ 注19に同じ。
- ²¹ 岩井隆盛「加賀と能登の『挨拶語』」（『言語生活』第45号、筑摩書房、1955年6月）
- ²² 浅見徹「あいさつことば西と東」（『言語生活』第110号、1960年11月）
- ²³ 『日本語学』第4巻第8号（明治書院、1985年8月）
- ²⁴ 『国文学 解釈と教材の研究』第44巻6号（學燈社、1999年5月）
- ²⁵ 藤原与一『続昭和（→平成）日本語方言の総合的研究 第三巻 あいさつことばの世界』（武蔵野書院、1992年12月）
- ²⁶ 寺島浩子『「あいさつ言葉」の魅力—京言葉を起点として—』（武蔵野書院、2016年3月）
- ²⁷ 倉持益子「あいさつ言葉の変化」（『明海日本語』第18号増刊、2013年11月）、p.261。
- ²⁸ 佐久間鼎『現代日本語法の研究』（厚生閣、1940年4月）
- ²⁹ 木枝増一『高等国文法新講 品詞篇』（東洋図書、1937年2月）
- ³⁰ 文部省編『中等文法 口語』（1947年4月、同年11月修正発行）
- ³¹ <http://www.textbook-rc.or.jp/library/search/index.html>。2016年10月5日に検索・閲覧した。
- ³² 筆者が確認した教科書図書館所蔵の資料（所蔵番号 B3.112.36（37））は、見本のため発行年月日が空欄。「教科書目録データベース」によると、「検定済年・著作年」・「教科書目録出版年」が昭和36年、「使用年度」が昭和37年～昭和40年。
- ³³ 筆者が確認した教科書図書館所蔵の資料（所蔵番号 B3.112.40（41））は、見本のため発行年月日が空欄。「教科書目録データベース」によると、「検定済年・著作年」・「教科書目録出版年」が昭和40年、「使用年度」が昭和41年～昭和43年。
- ³⁴ 筆者が確認した教科書図書館所蔵の資料（所蔵番号 B15.111.46（47））は、見本のため発

行年月日が空欄。「教科書目録データベース」によると、「検定済年・著作年」・「教科書目録出版年」が昭和46年、「使用年度」が昭和47年～昭和49年。

³⁵ 筆者が確認した教科書図書館所蔵の資料（所蔵番号 B15.111.43 (44)）は、見本のため発行年月日が空欄。「教科書目録データベース」によると、「検定済年・著作年」・「教科書目録出版年」が昭和43年、「使用年度」が昭和44年～昭和46年。

³⁶ 教科書図書館所蔵の資料（所蔵番号 B11.112.61 (62)）を確認した。

³⁷ 教科書図書館所蔵の資料（所蔵番号 B11.112.58 (59)）を確認した。

³⁸ 松井栄一「辞書における品詞表示」（鈴木一彦・林巨樹編『品詞別日本文法講座10 品詞論の周辺』、明治書院、1973年6月）、p.79。

³⁹ 初版（1959年11月）は金田一京助・佐伯梅友編。改訂版（第2版、1962年3月）で編者に大石初太郎が加わり、さらに「常用」新版（第5版、1982年1月）より野村雅昭が、第9版（2011年1月）より木村義之が加わった。

⁴⁰ 石川創「感動詞の認識に関する音声上の問題について」（『駒沢女子大学研究紀要』第21号、2014年12月）にて調査した1999年以後に発行された一般向け、中高生向け、小学生向けの小型国語辞書22冊においては、「ありがとう」、「おはよう」は20冊、「こんにちは」は19冊が感動詞とされている。

⁴¹ 注40と同じ22冊を確認すると、「かしこ」は7冊が感動詞としているが、その他の頭語・結語については、佐竹秀雄・三省堂編修所編『デイリーコンサイス国語辞典』第5版（三省堂、2009年6月）、金田一春彦・金田一秀穂編『学研現代新国語辞典』改訂第5版（学研教育出版、2012年12月）が一部の語を感動詞として扱うほかは、ほとんどの辞書が感動

詞として扱っていない。

⁴² 金沢庄三郎編『辞林』（1907年4月）。国立国会図書館所蔵の資料（請求記号：31-319イ）を確認した。

⁴³ 金沢庄三郎編『辞林』（1911年4月）。国立国会図書館所蔵の資料（請求記号：31-319ホ）を確認した。

⁴⁴ 上田万年・松井簡治『大日本国語辞典』全4巻（金港堂書籍、1915年10月-1919年12月）。国立国会図書館所蔵の資料（請求記号：359-24）を確認した。

⁴⁵ 落合直文『ことばの泉』（大倉書店、1898年序）。国立国会図書館所蔵の資料（請求記号：75-81）を確認した。

⁴⁶ 落合直文著・芳賀矢一改修『日本大辞典 言泉』全3巻（1921年12月-1922年10月）。国立国会図書館所蔵の資料（請求記号：R813.1-O15ウ）を確認した。

⁴⁷ 大和田建樹編『日本大辞典』（博文館、1896年10月）。国立国会図書館所蔵の資料（請求記号：33-266）を確認した。

なお「国立国会図書館所蔵」とした資料については、『国立国会図書館デジタルコレクション』（<http://dl.ndl.go.jp/>）にて閲覧したものである。ただし一部の資料は国立国会図書館内、または国立国会図書館の「図書館向けデジタル化資料送信サービス」に参加する一部の公共図書館・大学図書館等でなければ閲覧できない。